

立業社 [複写サービス業]

Ritsugyosya Co.,LTD

DreamLabo 5000



DreamLabo 5000+オンデマンド
DreamLabo 5000+大判インクジェットプリンタ
ノウハウを生かした複合技で新たな付加価値を生み出す。

株式会社立業社は富山県富山市に本社を置き、70年を超える歴史を持つ複写サービス業の会社です。図面や書類の入出力を中心としたドキュメントサービスにより、地域のさまざまなビジネスをサポート。近年ではデジタルデータからのオンデマンドプリントをメインに、印刷会社では対応できない、細かいニーズの小ロット案件に特化することで確かな実績を築いています。

立業社は2016年、ハイクオリティ・オンデマンド印刷機 DreamLabo 5000 を導入しました。オンデマンドプリントを得意とする同社のなかで DreamLabo はどのように活用されるのか。

代表取締役社長・山本正純さん、営業統括本部本部長・君島清さん、製作本部・長谷川千亜紀さんにお話を伺いました。

— DreamLabo についてお話を伺う前に、複写業という分野の中でお客さまからのニーズが過去、どのように変化してきたのかを教えてください。

山本 ● 立業社の成り立ちからお話しますと、創業者・浅田照は、中国で商社マンをやっておりまして、終戦を中国で迎えました。日本に帰国して生まれ故郷の富山に戻ると焼け野原になっていたのです。なんとか自分の力を国土の復興に活かさないか、恩返しできないかと、文具具の販売

と建築図面などの複写をする事業を興しました。創業者はもともと技術者でしたから、青焼き(青写真)の機械を自分で作ったのです。これが立業社のはじまりです。

最初は青焼きだったものが白黒のコピー、そしてカラーコピーへと変わりましたが、“コピーを中心としたドキュメントサービス”という点では一貫していました。しかし、コピー機・プリンターの性能が上がり、お客さまが自社でも複合機を導入するケースが増えたことで、いまや私たちのような複写専門業者にコピーを外注する必要がなくなってきています。従来の原稿をお預かりしてコピーをするという作業から、データをお預かりして出力をするというサービスがメインに変わっていったというのが複写業の現状です。

— 出力センターや印刷会社と職能的には近くなっていると感じます。印刷業界の中ではここ10年来、「プリントオンデマンド(Print On Demand / POD)」というキーワードがありますが、少数からの細かい出力に対応してきた複写業は、常に POD であったということもできるのではないのでしょうか。

山本 ● そうですね。部数が多いものは印刷、50、100、200部といった少数数は私たちのような会社で出力するという使い分けが基本にあり

ますが、仮に印刷会社に依頼したとしても、印刷会社が私たちに外注するというケースもありますから、お客さまとしては印刷と複写・出力との境界はなくなっていると言えるかもしれません。

私たちの会社では、印刷会社がまだ POD には目が向いていないうちから、県内でもっとも早く、POD に取り組み始めました。その後、書類等の電子化によって印刷自体の需要が減り、印刷会社が自社で POD 機を導入しはじめると、私たちとしてはまたどう差別化していくのかを考えなければならなくなりました。その解決策として導入を決めたのが DreamLabo です。

— DreamLabo を導入するにあたり、障害や克服すべき課題はありましたか？

山本 ● これまでも、“多くても100部、200部”という案件を中心に担当してきましたから、ワークフローとしては今まで複写機でやってきたものを DreamLabo に置き換えるだけです。すんなり受け入れることができました。私たちは DreamLabo によるハイクオリティ・オンデマンド・プリントサービスを「RiDL(リデル)」と名付けて、既存の B to B だけでなく、B to C も見据えたサービスを展開しています。

— これまでのオンデマンド機やインクジェット



個人から研究のために出力および製本を依頼された『啓沃堂随筆』。原本よりも大きなサイズで出力できるのはデジタルアーカイブにオンデマンドプリントの組み合わせならではの。古い資料だが、DreamLabo の描画力によって、はっきりと読むことができる

『源氏雲浮世画合』。デジタルアーカイブの画像を利用して、サンプルとして作成したもの。現在、歴史的な資料等はデジタル化が進んでいるが、立業社ではこうしたアーカイブの再利用に DreamLabo 活用の道を模索している

プリンタと比べて、DreamLabo ならではのメリットを感じる点は何ですか？

君島 ● オンデマンド機としては品質、色の再現性、安定性においてすぐれており、インクジェット機としては両面プリントができることですね。インクジェットプリントのクオリティで、高速両面出力ができるようになったことで、本そのものはもちろん、本の綴じ込み素材としても提案できるようになりました。

長谷川 ● 安定性は電子写真方式(レーザープリンターの印刷方式)のオンデマンド機と比べて格段にいいですね。1枚目と100枚目をまったく同じ色で出すことができますし、表裏の見当がずれることもありません。熱によって紙が伸縮してトンボの位置がずれるということもありませんから。

君島 ● 色校正=実機校正かつ本紙校正なので「これが本番の印刷でも出てきます」と言い切れますから、校正の精度は段違いですね。

長谷川 ● DreamLabo の品質に関しては、色のあざやかさ、彩度に目が行きがちなのですが、精細でシャープな描画とグラデーションなどの正確なトーン表現によって、よりきれいに見えるのだと思います。お客さまからいただくデータはまだ sRGB が多いのですが、やはり DreamLabo の色域を最大限に活かせる AdobeRGB を活用してほしいですね。sRGB でもったいないですから。

— 現状、どのように DreamLabo を活用されているのでしょうか。

君島 ● たとえば、工事記念誌『富山大橋』では、写真がメインのページに DreamLabo を使い、文章がメインのページはオンデマンドプリント、一部にオフセット印刷を組み合わせました。150部という少数数ではすべてをオフセット印刷で作

るにはコストが合いません。お客さまの予算とコンテンツにあわせて印刷方式を選択し、一冊に仕上げるといった案件はこれまでも手がけておりまして、そこに DreamLabo という選択肢が増えたかたちですね。こうしたノウハウは我が社独自のものだと思います。弊社は 大判インクジェットプリンター・Canon imagePROGRAF PRO-4000(B0対応・12色・顔料)も導入していますが、DreamLabo 相当のクオリティで B0 まで出すこともできますから、本やパンフレットを DreamLabo で作り、ポスターは imagePROGRAF で出力するという複合技も可能です。

— 今後の DreamLabo の活用予定を教えてください。

君島 ● DreamLabo を導入した際に地方紙に記事を書いてもらったことがきっかけで、古文書のデジタルアーカイブに掲載されているデジタルデータを本にしてほしいという依頼を受けたのですが、「本というかたちで、手に持って研究できるのはすばらしい」と非常に喜んでいただけました。高解像度で画像化されたデジタルアーカイブのひとつの利用手段として、DreamLabo によるハイクオリティ・オンデマンドプリントは可能性があるのではないかと考えています。

長谷川 ● ただプリントできればいいというのではなく、少数数だとしても10年後、20年後にも残せるような、残っていくようなものとして提案できたらいいですね。

山本 ● 従来、請け負っていた保育園・幼稚園の卒業アルバムも DreamLabo に置き換えていく予定です。全員が同じアルバムを持つのではなく、表紙に自分で書いた名前や絵を入れて“自分だけの卒業アルバム”として展開していたもので、そこに最高画質という付加価値をつけて差

別化するかたちです。

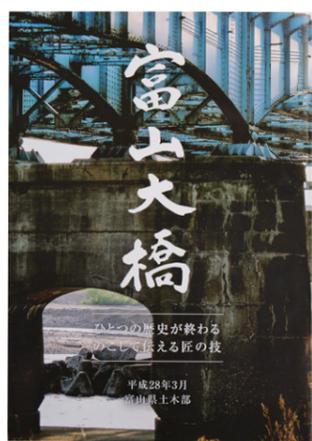
私たちは創業以来、70年にわたって常に技術、環境の変化にさらされ、その波を乗り越えて来ました。そうした変化の中でお客さまから支持をいただくには、常に新たなものを考え、提案するということを繰り返していくしかありません。これまでにない品質と安定性を持つ DreamLabo によって、お客さまに新たな付加価値を提案していきたい。そう考えています。

山本正純
Masazumi Yamamoto
株式会社立業社
代表取締役社長

君島 清
Wataru Kimijima
株式会社立業社
営業統括本部
本部長

長谷川千亜紀
Chiaki Hasegawa
株式会社立業社
製作本部

株式会社立業社 / 富山県富山市。1946年創業。コピーサービスが中心だったが、いまはドキュメントサービス、オンデマンド印刷がメイン。オフィス機器の販売・保守、人材派遣・人材紹介等、2社のグループ会社を持つ。



『富山大橋』 編集・発行：富山県



文章や図面、記録写真ページはオンデマンド印刷(左)、ビジュアルページは DreamLabo で印刷されている(右)